

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	加藤 大鶴
論文題目	漢語アクセントの史的形成についての研究
審査要旨	
<p>本研究は、日本語の中に漢語アクセントが形成される過程を明らかにすることを目的とする。そもそも漢語とされるものの多くは古く中国語から借用されたもので、当初は知識人たちの間において外国語としての発音が求められたが、しだいに日本語に融和するようになり、そのアクセントも中国語の原音声調から日本語のアクセント体系になじむように形成されてきたものと推定される。本論文は、その過程を諸資料によって跡づけ、そこにあらわれた漢語アクセント形成の類型を研究したものである。</p> <p>漢語アクセントは、それを構成する漢字の声調の組み合わせをもとに検討されることが多い。その字音声調は、反切などの注記のほか、とくに漢字一つひとつに差された声点によって知られる。しかし日本伝来の字音は、古代から中世にかけて「呉音」と「漢音」との二つの系統に大別され、したがって声点のあらかず声調もいずれの系統であるかによって異なる音調をあらわすことがある。さらに日本漢字音は、中国語原音声調を自らのアクセント体系になじむかたちで取り入れ、それがさらに日本語独自の変化を被ることになるのであるから、その分析には細心の注意が必要になる。著者はこれらに加えて、取り扱う資料それぞれの位相性を重ねあわせて、そこに反映した字音声調と漢語アクセントとを分析する。それはすなわち、それぞれ位相的に異なる漢文訓読資料、和化漢文訓読資料、和漢混淆文資料を扱うことによって、その間にあらわれる原音声調の継承の程度をはかり、そこに反映する漢語アクセントの形成過程を推定しようとするものである。</p> <p>本論は3章6節から成る。まず第1章「字音声点を分析する上での基礎的問題」では、医書である『医心方』半井家本・仁和寺本(平安中期成立、院政期写)を取り上げ、紛れやすい声点の認定などの問題を論じたいうえで、同書の字音注について言及する。著者によると、これら字音注は『本草和名』『和名類聚抄』を典拠としており、また反切注文には『玉篇』や切韻系韻書を参照しているものがあることが知られるという。このようなことから、漢文訓読資料に見られる声点は、広い意味での字音学習・字音伝承の一環として差されたものであって、ただちにその時代の漢語アクセント資料としては扱えないことを述べている。</p> <p>第2章「原音声調の継承と変容」においては、位相の異なる資料群を取り上げ、それらに中国語原音声調を規範とする「字音」的性格と、日本語音韻体系や拍構造にもとづく「語音」的性格を認め、そのうえで両方の特徴がそれぞれに重なり合いながら実現していることを明らかにした。さらに、そこに「字音」から「語音」へと、日本語に融和していく過程をみようとする。</p> <p>まず融和現象の一つとして取り上げられるのは「音調のグループ化」ということである。とくに『医心方』においては、呉音系字音にもとづく漢語のうち、植物に関する語に《去上》型が多いという。このことは『和名類聚抄』『類聚名義抄』で「俗音」等と注記される語にも認められることであり、12世紀以前に、すでにこのような「音調のグループ化」があったことを論じている。</p> <p>一方、和化漢文訓読資料の『新猿楽記』(平安後期成立)鎌倉期の写本数種には音調の安定しないものがあり、それらには《去上》型と《平上》型との間の揺れが認められるという。これはいわば「音調の多様化」の一例である。そして、このことは3拍漢語よりも4拍漢語に多いということで、著者は「拍数が長くなれば伝承の規範性が弛緩しやすい」と推定している。</p> <p>つづいて、同じく和化漢文訓読資料である『尾張国郡司百姓等解文』所載の二字漢語に差された声点を分析して、そこに漢音読み漢語と呉音読み漢語の混在することを指摘し、さらに原音声調を継承しつつも、いわゆる《中低形回避》がなされて《去去》型や《上去》型の語がそれぞれ〈去平〉や〈上平〉に差声されていることを指摘する。また《去去》が〈平去〉〈平上〉に差されている例をあげて、これまでに指摘されていない《中低形回避》の方法を提示している。</p>	

第3章「漢語アクセントの形成」では、まず《下降調》をあらわす《平軽》音節について、これを従来高いところから降る、高降り音調と同じように解してきたことに疑問を呈し、「低い下降」であった可能性を述べる。つづいて《上昇調》をあらわす去声の音節について、これが二字漢語の後項に立つとき、高平になるか低平になるか二つの《中低形回避》の方法があって、呉音読み漢語と漢音読み漢語でおおよその区別のあることを論ずる。すなわち漢音読み漢語はそれを構成する漢字一つひとつの独立性が高いので、後項はその低起性を生かして低平になることが多く、呉音読み漢語は仏典読誦のなかで臨時的に去声の音節が高平化することから、後項はその低起性を失って高平になるという。

著者は、中国語原音声調から日本語の中に漢語アクセントが形成されるモデルを、A) 外国語としての発音が現れる位相、B) その正確さは措くとしても、外国語学習によって得られた知識による発音が現れる位相、C) 日本語アクセント史に融和した漢語アクセントがあらわれる位相、という三種を、漢文訓読資料、和化漢文訓読資料、和漢混淆文資料それぞれに当てはめて、そこに見られる字音声調ないし漢語アクセントの実現されていく様子を漢語アクセント形成史のうえに位置付けようと考えた。そこには、原音声調を規範として継承しようとする力と、日本語アクセントに融和した音調の実現によって原音声調を変容させようとする力が交錯する。

かかる変容は、まずは一資料内に漢音読み漢語と呉音読み漢語とが混在する現象としてあらわれ、さらに、本論文で詳しく検討される《中低形回避》が認められるところに端的にあらわれるという。それはたとえば二字漢語を前後の漢字それぞれの声調の組み合わせとして捉えた場合、上昇調と上昇調とが連続するようなものがあらわれるが、それは中央に音調の窪みをもち、一語としては認めにくい音調になる。そのようなものを、これらの資料にあたってみると、いくつかの方法で中低形を回避していることが明らかになるのである。

また本論文では、《低起上昇型》に、かつて「型の揺れ」があったことも明らかにした(すなわち《去上》《平上》《平去》などが、音調上 RHH・LHH・HHH のように実現した)。しかし、このように変容した音調のすべてが後代に伝わったというわけではなく、資料性を考慮しなければならないことが述べられている。

さらに、このような原音声調の変容としては捉えがたいものもあり、漢語アクセント史のうえで、一つひとつの漢語が新たなアクセント型を獲得することもあったことが確認されてもいる。

著者はまた、日本語アクセント史にいわゆる「体系変化」の前後で、共通して用いられる漢語アクセントを比較し、これと原音声調との対応をみている。それによれば、原音声調と「体系変化」前の資料にあらわれる音調とで整合的に対応する比率は全般に 80%弱であり、「体系変化」前後では 50%強であるという。また拍数の少ない漢語に対応率が高く、とくに前項が 1 拍の漢語のほうが 2 拍に読まれるものよりも対応率が高いともいう。また、字音声調の種類が複雑な漢音読み漢語(70%弱)のほうが、その単純な呉音読み漢語(80%強)よりも対応率がやや低いことも指摘されている。

以上、本論文は、日本語に借用語として取り入れられて定着する漢語のアクセントを、日本語アクセント史の中に位置付けて観察し、そこに見られる特徴を明らかにした研究である。そのような観点からの研究はこれまでにはほとんどないものであって、博士(文学)の学位にふさわしいものと評価される。

公開審査会開催日	2016年 1月 9日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	早稲田大学文学学術院 教授	上野 和昭	日本語学	博士(文学)早稲田大学
審査委員	早稲田大学文学学術院 教授	高梨 信博	日本語学	
審査委員	早稲田大学文学学術院 教授	森山 卓郎	日本語学	学術博士(大阪大学)
審査委員				
審査委員				

